

Case Study 4

■聴覚障害 2級/3級
■フロントオフィス/人事

東京都千代田区紀尾井町

ホテル ニューオータニ

幼いころから 憧れていたホテルマン。 やりがいのある責任の重い 仕事です。

フロントオフィス課
中込 淳暢さん
(なかごめ あつのぶ)



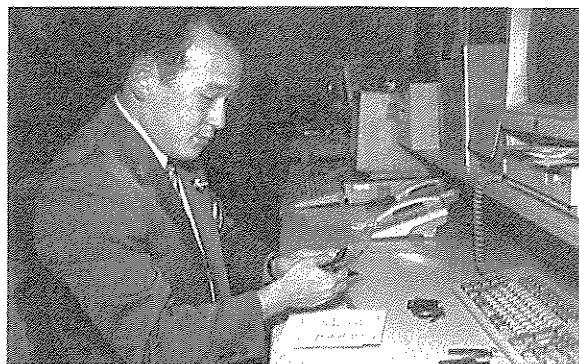
▲ ずらりと鍵の並んだ戸棚を中込さんがすべて管理している

ろう学校の夏休み研修が 聴覚障害者雇用につながった

ホテルニューオータニは、都心に位置する客室1600余の広大なホテル。その円滑な運営を担う大きな組織の中に、13人の障害をもつ社員が働いています。その多くは聴覚障害。8年ほど前から近隣のろう学校と提携して夏休み研修(アルバイト)をおこなってきたことが、採用に結び付いています。フロントオフィス課の中込さん(聴覚障害2級)もその一人。入社8年目の彼は、客室課を経てこの部署に配属され、現在はフロント内部で客室の鍵の管理を任されています。優しい笑顔が印象的な中込さんに筆談で話をうかがいました。



▲ 明るく前向きな人柄は
職場のムードメーカー



▲ 鍵のメンテナンスも重要な仕事

社員の多くが手話を学んで コミュニケーション

「お客さまの鍵はホテルの商品。紛失や持ち去りの数を確認し、必要ならばドアロック交換の指示を出します」という中込さん。鍵の管理はホテルのセキュリティを問われる仕事。責任の重さを感じる毎日です。上司の今野照穂さんは、彼の仕事ぶりを高く評価。「決していい加減にできない仕事を、大変真面目にやってくれる。みんなが信頼しています」。

そんな中込さんも入社当時は、周囲の人とのコミュニケーションがうまくできなかったそうです。「私自身も手話ができず、なかなか理解してもらえなかった。今は自分も周囲も手話を覚えて社交性も身につきました」と明るい表情です。社内には手話サークルができ、簡単な会話ができる社員も増えました。仕事を円滑に進めていく上で、コミュニケーションは何より大切。本人も周りも、そのための努力は惜しみません。とはいえ、伝達手段に手話と筆談が加わるだけで、人として何ひとつ変わりはない。それは社内の誰もが感じていること。「コメちゃんは大酒飲みで旅行が好きな楽しい人。何も特別なことはないですよ」と、同僚の受け止め方もいたって自然体です。

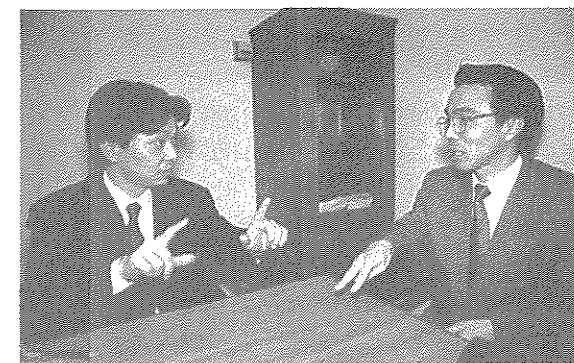


▲ 業務の打ち合わせも筆談で素早く

コンピュータ管理なら 彼の右に出る者はいません

(人事課・池田さんの場合)

人事課の池田大輔さん(聴覚障害3級)も、夏休み研修がきっかけで入社しました。現在の主な仕事はコンピュータ管理。研究熱心で「コンピュータのことなら右に出る者はいない」と周囲の誰もが認めるほどの才能の持ち主です。昨年ホテルで催された日米経済協議会南東部会は、入社以来最も印象深い仕事となりました。



▲ 同僚と手話でコミュニケーションする池田さん

各部署から集められたスタッフでチームが生まれ、池田さんは会議のスケジュール管理を任されたのです。「大変緊張感のある仕事でした。終わった後で米国側の議長からサンクスレターをもらったことは一生忘れません」。オフには芝居をしたり、同僚とカラオケに興じたり。そのキャラクターは物怖じせずに前に出ていく仕事ぶりにも現れています。中込さんも池田さんも、企業側の積極的な環境づくりと同僚の配慮に十分に応え、ホテルマンとしてのプライドにあふれた仕事ぶりが印象的でした。

SIDE STORY

プラス面に目を向けて、雇用のチャンスを広げたい。



人事課長
川鍋 一夫さん

川崎ろう学校などと連絡を取り、研修をして興味を持ってくれたら、試験を受けてもらっています。常に働きかけてはいますが最近は希望者も少なく、実際はなかなか雇用が進みません。しかし社員の理解はかなり進んできました。客室係でお客さまと接する人もいますが、メモを携帯しているため大きな問題はありません。私が色が黒いように耳が不自由なのも個性の一つではないでしょうか。彼らは私にはない素晴らしい感性をもっています。健常な人がプラスで障害をもつ人がマイナスでは決まてないんです。とにかく本人の前向きな姿勢が見受けられることが大切だと思います。